

書の鑑賞の深まり

—『書論・鑑賞Ⅰ』のクラスレポートから—

林 朝 子

Deepening of Appreciation of Calligraphy ; Through Practice of “Theory and Appreciation of Calligraphy”

Asako HAYASHI

要 旨

現在、書道・毛筆文化への再評価が進んでいるが、書を鑑賞することは一般的に十分な理解を得られているとは言い難い。そこで『書論・鑑賞Ⅰ』履修生 9 名を対象に、書の構成要素の理解の徹底と実際の書作品を多く見ること、書の鑑賞への意識の高まりと鑑賞内容の深まりを目指した。その結果、自身の鑑賞の視点が明確化され、直観的鑑賞に留まらない、具体的な視点からの分析的鑑賞を様々な書に対して行う姿勢へと結びついたことが示された。

キーワード：書の鑑賞、造形性、書の構成要素、分析的鑑賞

1. はじめに

現在、書道・毛筆文化の再評価・再認識が進んでいる。例えば、日本の書道文化のユネスコ登録を目的とした活動、全国の書写書道団体による「毛筆を第 1 学年から取り上げ」る指針の提案などが挙げられる。現行の学習指導要領においては、毛筆の導入は小学校第 3 学年からであるが、「(日本語の) 表記を担ってきたのが毛筆による我が国の文字文化であり、毛筆文化は単に表記のみならず、美への発展となり、日本文化の象徴的存在」¹⁾とし、毛筆の存在意義と共に、子どもたちが早い段階から毛筆に触れる重要性が唱えられている。また、現行の中学校学習指導要領でも第 3 学年には「身の回りの多様な文字に関心をも」つことが挙げられており、教科書には様々な書体や書風、古典が資料として多く取り上げられるようになった。

一方、小中学校教員を目指す多くの学生に指導する中で、彼らの書や毛筆に対する関心や意識は決して高いとは言えず、書写指導に関しても、特に毛筆指導の場合、積極的に行いたいとする割合は低い。しかし、学校現場においても書道・毛筆への取り組みが重視される傾向にある中、教員を目指す学生が今以上に書道・毛筆に対して意識を向けることが望まれる。

書道・毛筆を取り巻くこのような現状を鑑み、本実

践では「書を見る」力を培うことを目標とした。書の見る力を身に付けることで、書道・毛筆に対する関心や意識が高まり、小中学校書写での指導内容の変化にもつながっていくと考える。

2. 実践概要

本実践は平成 28 年度前期『書論・鑑賞Ⅰ』において行った。履修生は 9 名で、全員が中学校国語教諭免許取得を希望している。中学校国語科書写への関連も踏まえた上で、書の鑑賞の深まりを目指すために授業のテーマを設定した(次ページ表 1)。

授業では、「書を見ること」への抵抗を減らし、実際に書を見る観点に気づけるよう、印刷されたものが中心ではあるが様々な書を見ることを徹底して行った。

鑑賞の基盤となる書論については、上田桑鳩『書道鑑賞入門』(1963)を導入的に用いた。上田が序において「専門家を対象にしているのではなく、素人や初学者に理解していただくためのもの」と記しているように、書の位置づけと共にその鑑賞方法に関して、実際の書を具体的に挙げ、平易に理解ができるような内容となっている。また、上田は書を造形芸術であると捉えており、「書いた字の形の取り方や、筆勢や、墨色の美しさ、という造形的な状態が、作者の個性や感情

を表している場合、その文句の如何にかかわらず、またそれが読めようと読めまいと、やはり造形芸術としての独自性をもっていることを認めないわけにはいかない」(p.14)とし、読めるか読めないかで書の鑑賞が左右されてしまうことを危惧する立場である。本実践でも、文字を媒体とする書を前提とするが、鑑賞する際には、判読可能かどうかに関わらず、造形的なものとして捉える立場をとることとした。

表1 授業テーマ (15 回分)

回	授業テーマ
1	書の鑑賞とは
2	書の特徴・書が表すもの
3	書体・書風
4	附属中学校活動準備
5	書の構成要素Ⅰ
6	書の構成要素Ⅱ
7	附属中学校活動参加Ⅰ
8	書の美しさ・印
9	三重県展作品鑑賞
10	県展鑑賞発表Ⅰ(発表レジュメ)
11	県展鑑賞発表Ⅱ(同上)
12	仮名の書の鑑賞
13	附属中学校活動参加Ⅱ
14	書作品鑑賞発表Ⅰ(発表レジュメ)
15	書作品鑑賞発表Ⅱ(同上)・前衛書の鑑賞
最終レポート	

3. 対象データ

以下のデータ①と②を分析の対象とする。

①初回授業でのアンケート

初回授業の最初に、履修生の書や書の鑑賞についての背景を確認するために、アンケートを行った。

②授業後コメント、レポート3本

4・7・13 回目²⁾を除いた授業後に自由記述によるコメントを収集した。また、三重県展鑑賞レポート³⁾、書作品鑑賞レポート、最終レポートと3種類のレポートも課した。これらを基に、学生の書の鑑賞の変容や深まりの分析と考察を行う。

4. 履修生の背景—書と書の鑑賞に関して—

では、①初回授業でのアンケートを基に、履修生9名の書と書の鑑賞に関する背景を確認しておく。

4-1. 「書を書くこと」と「書を見ること」

まず、「質問1：書を書くことが好きか」に対する回答は、「好き」6名・「嫌い」0名・「どちらともいえない」3名であった。好きな理由としては、「太さの

変化、とめはらい等で自分の書きたいものを表現できる」「様々な表現ができる」「鉛筆とは違う感覚が好き」「書き終えたときの達成感」が挙げられていた。「どちらともいえない」理由は、「うまく書けない」という技術的な面と「書道に触れる機会があまりない」「授業以外で書かかない」といった「身近に書道がないこと」が見られた。

次に、「質問2：書を見ることが好きか」に対する回答は、「好き」1名・「嫌い」2名・「どちらともいえない」6名であった。好きな理由は「同じ文字でも雰囲気が変わったりして面白い」であったが、「嫌い」な理由としては「見ても知識がないからよくわからない」「何に注目して見れば楽しくなるかがよくわからない」、「どちらともいえない」理由としては「どのような観点で見ればいいかわからない」「鑑賞して何かを思えるほど知識がない」といった「書の鑑賞の観点や見方がわからない」といった理由が目立った。また「自分から進んで見るほどではない」「自発的に身に行くことは少ない」といった自分の意思で書を見ようとすることはないというコメントも見られた。

「質問3：書をゆっくり見ることはあるか」に対しては、「たまにある」1名、「ほとんどない」8名という結果であった。

質問1～3の履修生の回答から、「書くこと」と「見ること」の嗜好の回答がほぼ対照的な結果となり、履修生が「書くこと」と「見ること」は書に向かう姿勢として別のものであるという意識が強いことが窺える。また、「見ること」に対しては、見る観点が分からず、積極的に自分から見に行こうという意識も持てない現状が見られる。

4-2. 書から受けた感動

「質問4：感動を受けた書はあるか」に対する回答は、「ある」7名、「ない」2名であった。具体的な内容としては、「高校の時、書道の先生が実際に書いているところを見たとき」「高校の時、書道部の友人が書いているのを見て、こんな風に書けるのかと感動した」「高校の時、廊下に貼られた書道の先生の作品の迫力に圧倒された」「授業中、友だちが書いている作品を見たとき」「すごい大きな紙に書いてある作品を見たとき」「テレビで書家が書いていた線の勢い」が挙げられていた。これらの感動は、実際に書を書いている様子(画像も含め)、書かれた作品を目の当たりにした際に出てきている感情である。書とはどういうものかを知り、そして、書への何らかの感情を起こすためには、まずは実際の書を見ることが重要であると言えるだろう。本実践では、三重県展の書作品を実際に見る活動を取り入れ、書の様々な表現に直接触れ、

書に対する感情の変化を学生自身が体験できる場を設けた。

4-3. 小学校中学校での鑑賞

「質問5：小学校中学校で書を見た経験はあるか」に対する回答は、「ある」4名、「ない」5名であった。「ある」に対するコメントは「中学校で中国の書の写真などを参考程度に紹介」「作品ごとに比較をし、字に対して話し合った」「点画をじっくり見た」「作品をお互いに鑑賞し合い、よいところを伝え合った」であり、「ない」に対するコメントは5名全員が「書くだけで精一杯」⁴⁾という内容であり、1名が「作品は貼り出されるのでそれを各自見ていた」とも記していた。

小中学校の学習指導要領において、「書の作品を見る（鑑賞）」については取り上げられていない。しかし、書写指導において、目的に合った文字の適否の判断、自他の文字を認め合うことは重視⁵⁾されており、そのための一活動として互いの文字や作品を見ることが様々な方法で取り入れられている。中学校学習指導要領では「身の回りの多様な文字に関心をも」つことも掲げられており、書写教科書でも生活の中の様々な書体や書風の文字や書の古典の画像が取り上げられている。「身の回りの多様な文字に関心」を向けることで、高校芸術科書道への入り口としても位置付けられる。学生の中にも小中学校において「書を見た」経験の有無は分かれており、各学齢にあった書を見るための活動を学校現場においてさらに充実させていく必要性があろう。

一方、自身が教員となった場合を想定した「質問6：小中学校の書写の授業で書を見ることを行いたいのか」に対する回答は、「行いたい」7名、「行いたくない」0名、「どちらともいえない」2名であった。「行いたい」としたコメントには、「自分の作品だけでなく、他の人の作品も見たい」「書くだけでなく見ることで子どもたちの感性が磨かれる」「自分の作品とは違うものに触れ、自分の書に生かしてほしい」といった、自分以外の様々な書を見るのが子ども自身の文字や書に対する感性にも影響すると考えるものや、「日本の伝統的な文化に触れ、書に対する興味を持てる」「日本の昔からの表現方法にきちんと触れておくべき」といった日本の伝統的な表現方法としての書へ関心に向けさせる機会ととらえるコメントが見られた。「どちらともいえない」では「書くことに苦手意識を持っている子には苦痛になる」というコメントが見られたが、「書を見る」際にどの点に着目して見るのかが明確にわかっていないため、このようなコメントが出ていると考えられる。

4-4. 「書を見ること」と「書を書くこと」の関連

最後の「質問7：書を見ることと書を書くことは関係があるか」に対しては、9名全員が「ある」と回答した。コメントとしては、「他の作品を見ることで表現の幅が広がる」「こんな書を書きたいという意欲につながる」「見て感化されたことを書こうとする」「自他の表現の違いを知る」といった、様々な書を見るのが表現の広がりにつながると思えるコメントが見られた。

以上、本実践の対象者である履修生9名の「書を見ること」に関しての背景を概観した。大多数の学生が「書を見ること」は「書を書くこと」や書文化への関心の高まりにつながると考えているが、実際に「書を見ること」に積極的に取り組む姿勢はなく、その一要因としては「書を見ること」自体どのような観点で見ることなのかを理解できていないことが窺えた。

5. 学生の書を見る観点への気づきー授業後コメントとレポートからー

学生の授業後コメントとレポート3種から、学生の書を見る観点への気づきがどのように変化し、いかに深まっていたのかを見ていく。授業テーマに沿って、大きく「書の特質・書が表すもの」「書体・書風」「書の構成要素」「書の美しさ・印」「県展鑑賞発表」「仮名の書」「作品鑑賞発表」「前衛書」「最終レポート」の9つのテーマに分けて取り上げる。授業時には様々な書を見る活動を取り入れているが、ここでは学生のコメント等と関連するもののみ取り上げることとした。なお、以下で学生の授業後コメントを記す際には、コメント冒頭にアルファベットで学生を示すこととする。また、下線は書の鑑賞の観点や見方に関する内容、二重線は発展的な内容を表す。

5-1. 「書の特質・書が表すもの」

【手島右卿『崩壊』とジョルジュ・マチューのアンフォルメル作品】

2つの作品共、白に黒で書かれている。手島の作品は文字を書いており、筆順に従い、点や線を書き進めており、同じ場所に点や線を重ねることはなく、一回性の表現である。マチューの作品は、描く順は決まっておらず、上へ上へ重ねることも行われている。白と黒を使用している書と絵を比較することで、書の特徴を感じさせる目的である。

K2：書き手の気持ちが文字で表されている。

K3：太さ細さかすれなどの変化があって自然と文字が立体に見えるなど、書でしか表現できない面白さや美しさを感じた。

具体的な記述が少ないが、文字や線への意識が持っている。

【貫名海屋『勿々亭』と貫名菴翁『孤松亭』】

海屋と菴翁は同じ人物であり、70歳以前の雅号は海屋、それ以降は菴翁を主に用いた書家である。同じ人物の書であっても、年齢によって書風の変化が見られる例として取り上げた。

Y：一人の書家を時代を追って見ることは初めてで、歳を重ねることで書風が変わることに驚いた。

H2：同じ人が書いたものでも全く同じ書というのはいえないと思った。

同じ人であっても書風の変化が見られることへの驚きがあった。同じ人でさえ年齢によって書風の変化があることから、作者や時代が異なれば当然書風も異なることへの理解へとつながるであろう。

【天平写経と平安写経】

写経という書としての目的は同じであっても、時代によって書風が異なることに気づかせる例である。

H1：2つのものを見比べて「違う」ということはわかっていてもなぜ違うのかという理由がわからなかったが、時代背景の説明を聞いて、時代から考える文字の柔らかさや硬さというのが面白かった。

T：天平写経は唐の書の影響が大きく、平安写経は貴族文化の優雅さと日本性が生まれていて、それが線の太さによる力強さなどの変化がおもしろかった。時代背景から書を見ることを初めてした。

時代背景を踏まえての書風を見ることは初めてであったが、その時代性が文字にも影響されていることへの驚きがあった。線についての記述は「やわらかい」「硬い」「力強い」という表現に留まっており、鑑賞としては十分な深まりは見られない。

5-2. 「書体・書風」

【書体と書風】

5-1.で書風について取り上げたが、書体⁶⁾と書風⁷⁾の用語の概念を十分に理解できていない様子が窺えたため、改めて書体と書風の概念に着目した。

楷書（『九成宮醴泉銘』『孔子廟堂碑』『雁塔聖教序』）と隸書（『乙瑛碑』と『曹全碑』）を取り上げた。それぞれ楷書、隸書と書体は同じであり、それぞれ同時代の古典である。しかし、一見するだけで書風の異なりには気づけ、具体的な異なりは線や字形などに表れていることを伝えるための例である。

N：孔子廟堂碑のような硬さと柔らかさの混ざった字が好きだ。漢字という硬さを連想させるものに、丸みや滑らかさなどを感じるのが好きなのかもしれない。

Y：書風については触れることがなかったので、同じ書体の作品でも、線の丸みや線の反り方などが様々であることがわかった。

楷書と隸書という書体としては明確に捉えやすいものを取り上げた。線の丸みや反り方等への記述も見られ、少しずつではあるが、細かな点への視点の変化が感じられる。

【王羲之『楽毅論』と光明皇后『楽毅論』】

王羲之の『楽毅論』を光明皇后が臨書したものと考えられており、随所に羲之の影響が見られる古典である。臨書⁸⁾であっても、その人らしさのある書風が表れる点に気づかせるための例である。

H1：同じ文字を書いている、だれかのまねをして書いていても、やはりその人の癖や時代によるものは除けていない。そこに個性が表れている気がする。

K2：線の感じやそこから読み取られる雰囲気が全く異なっていて興味深かった。今も王羲之の臨書をしているのは感慨深い。

光明皇后が王羲之を臨書したものであっても必ず書風の違いは表れる点が理解できている。また、現在の書道でも広く行われている王羲之の臨書が、奈良時代にも行われていたことにある種の感動を持ったようである。時代に関係なく臨書が行なわれているのは当然のことであるが、書の長い歴史を感じる機会となったであろう。

5-3. 書の構成要素

書の構成要素については、2回授業を行った。

上田（1963）と『書の古典と理論』（全国大学書道学会 2013）を参考に、書の構成要素を次のようにまとめた。

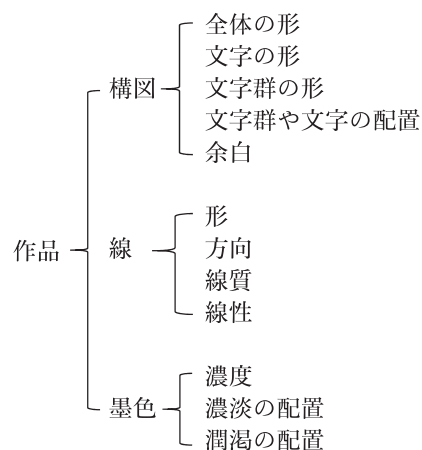


図1 書の構成要素

【王鐸『臨王羲之帖』】

王鐸は明末から清初期の人物で、非常に表現の幅の広い作品を多く残している書家である。行草書体や連綿が多様に使用されており、鑑賞する対象としては難度が高いものであるが、普段学生が目にすることは少ない王鐸の古典を見ることで、書の表現の広がりを感じ取りながら、書の構成要素を考える例として適当と考えた。

H1：今まで授業でみてきた書については、自分の直観、思ったことを再優先にしてきて、というより、そこに目を向けるしかなかったところがあった。しかし、今回の授業を受け、「書を見る」ということがどういうことなのか、着目するべきところはどこなのか分かり自分の中で見るべきポイントが大幅に広がったように感じる。これから書を見ていくときは今日のことを意識したい。

H2：今まで直観的に感じるだけにとどまっていたように思う。書というのは、多くの要素から構成されており、一つ一つの要素に工夫の余地があったのだと知った。線の中でも線性による文字の雰囲気の違いが面白いと思った。今まで構図に着目することがなかったので、県展では特に着目してみたい。

K4：書を見るとときに、基本的なポイントはあってもどれを素晴らしいと思うかはその人次第なので、芸術は難しいなと思った。筆の弾力は今まであまり意識したことがなかったが、無意識のうちに使っているかもしれないなと思ったので、今度書くときは意識して使ってみようと思った。

T：筆の弾力を初めて知った。普段あまり意識していなかったが、筆にも弾力があり、弾力で払いやハネを意識するとよいと思った。同じ作者でも書体によって形は様々であるが、その共通点や癖があることを知った。県展で初めて書の展覧会に行くので、しっかりみてみたいと思う。

K1：王鐸は歳という字の途中で墨を足していたので、そのような方法もあるんだという驚きとともに、書はルールなどがなく自由なんだなというのを感じた。また、書を見るときのポイントを学んだので、いろんな視点で書を見れるように学習していきたい。

K2：鑑賞の仕方について、今までは何となく全体の雰囲気や「やわらかい」「力強い」など感じていたが、その要因を細かく分析することの重要性がわかった。中でも、特に線に目を向けることがポイントであると知り、今まで意識せずに「墨が多くて、ぐっとしているから力強そう」「線が丸っこいからやわらかそう」などと考えていたが、それが線質を感じとっていたことによることや、その作者の線性であることのような専門的な見方ができるようになりたいと感じた。

Y：書を鑑賞するときに見るポイントとして、構図、線、などの説明があったが、同じ作品の中に出てくる同じ文字でも違いが見られ、次に書く文字や隣の列とのバランス、墨を足す場所など様々な要因が考えられ、おもしろいと思った。

K3：同じ人の字でもそのときの心情などによって書の太さ細さ空間かすれなどが変化するので、線質に同じものはないのだということを学べた。そのため、書を鑑賞するときは、線質を感じ取り、どうしてそう感じたのか、要因を分析することが大切であると思った。また、逆に

線性は書いた人の共通性を感じ取ることができるのだとわかった。「〇〇らしさ」を感じるとることができるように、その人の書を見比べたりする必要があると思った。

K2：墨色について、特徴的な作品をカラーで見ることができて、濃度の違いなどが視覚的によくわかった。一本の線であっても、筆の先端がなぞる部分と中側がなぞる部分とで濃淡が目に見えて異なっていることに驚いた。県展に行けば圧倒される大きさの作品に出会うことも多いと思うので、墨に注目してみたい。また、日頃見ることや触れることのないような紙も見ることがあると思うので、様々な観点に目を向けたい。

N：一度に様々な作品を見たが、特に嫌いな書がなくどの作品にもそれぞれ好みの箇所を見つけられた。書展に行ったときも、どの作品にも好きな部分を見つけたいと思う。

K1：私は書を見ると、全体の印象や雰囲気しか感じ取ることができていなくて、一文字一文字は一画の特徴を把握するに至っていないので、書を見る目をもっと養っていきたいと感じた。また、新しい書を見たとき、まず何が書いてあるかばかりに注目してしまっていたので、造形性や墨色などの感じも第一印象で味わえるようになりたい。

まず、学生の記述の多さから、様々な気づきや考えが得られたことが窺える。書の構成要素を具体的に示しながら作品を鑑賞することで、どのように書を見ればよいのかが明らかにできたようである。「着目すべきところはどこなのか分かり自分の中で見るべきポイントが大幅に広がった」「どの作品にもそれぞれ好みの箇所を見つけられた」といった記述からも明らかに、書の何をどのように見ればよいかという点について、自身でも「できる」「わかる」という実感が得られた様子が見られる。

また、県展での鑑賞への意欲的な記述や書を見る視点を更に深めていきたいという記述も見られ、書を見るとこへの楽しさを感じられているようである。

5-4. 書の美しさ・印

【書の美しさ】

書の美しさを表す言語表現にどのような語彙が使用されるのかを取り上げた。5-3. で触れたように、書を見る観点は広がり、細かい点から見る姿勢が生まれていたが、感じたことを言葉でどう表現すればよいのか、どのような語彙を使用するのが適当なのか、迷いがあるようであった。

そこで、上田（1963）に基づき、具体的な作品例を挙げながら、「軽やかな／重い美しさ」「暖かい／冷たい美しさ」「潤った／渴いた美しさ」「動きの／静かな美しさ」「澄んだ／含蓄のある美しさ」「整齊な／複雑な美しさ」「素朴な／優雅な美しさ」「稚拙な／巧緻な美しさ」という対照的な表現で表される書の美しさを取り上げた。

T：力強いと弱々しいでは、一見ポジティブな意味とネガティブな意味のように感じるが、書ではそれぞれ力強くても弱々しくても美しさを持っていると思った。美しさの比較は特徴（良さ）をそれぞれ見つけることができるのでいいと思った。

K4：書を評価したり感じたりする際の基準に「整った」と「個性的」な、が対になっていて、なるほどなと思った。また、温かさや冷たさは書いてある文字が読めるときは、選ばれた文字自体からも感じるができると思うので、「雪月花」はそういう意味では、どちらも冷たい印象を受ける作品なのかなと思った。

K2：書を見た時に感じる美しさについてのことは実際に自分の目で書作品を見たとき、自然に出てくる言葉なんだろうと思う。

K3：「美しさ」にはやわらかい、力強い、激しいなど、多様な形容の仕方があり、県展に行くときにはその書に応じた、自分が感じた形容の仕方で表現したいと思った。人によっては、同じ書でも違う感じ方、表現の仕方があると思うので、発表を聞くのが楽しみです。

Y：書表現する言葉として、たくさんの形容詞が出たが、同じ作品であっても多様な言葉で表現できる書は面白いと思った。また「やわらかい」と対になるような言葉として「かたい」以外にも出すことができるのは、文字に対して、線に対してなど、様々な観点があるからだと感じた。

N：書の美しさを表す言葉をたくさん出したが、まさかその反対語も美しさの表現に入るとは思わなかった。マイナスイメージの言葉も美しさの表現になると驚いた。元氣や大きいも私の中ではあまり美しいとは結びつかないが、それを美しさにとらえる人もいるのだと知ることができた。

書の美しさを形容する表現に関しても多くの記述が見られた。語彙が持つプラス・マイナス／ポジティブ・ネガティブイメージという評価的な意味ではない視点からの語彙使用に多少の戸惑いがあったようである。しかし、「やわらかい」と対になるような言葉として「かたい」以外にも出すことができるのは、文字に対して、線に対してなど、様々な観点があるからだと感じた」「同じ書でも違う感じ方、表現の仕方があると思う」とあるように、書の観点が様々あり、また、その観点で書をどう感じ、どう表現するかは多様であることへの気づきが見られた。

【印】

書作品には落款といわれる「作品を書き上げたあとに署名捺印をする」⁹⁾ことが慣例であるが、落款により作品全体の印象が大きく変わることがあるほど、印の役割は大きい。印も篆刻として書の一つの表現方法であり、鑑賞の対象となるものである。『書法之美』（相川政行監修 2002）の「篆刻概観」（pp.204～207）を具体例として、印・篆刻の鑑賞について取り上げた。

T：細かいところまでほってあり、ハネ・ハライもきれいに彫られていた。

H2：刻るといって、私の中ではかたいとかずしっとした雰囲気を感じて浮かべていたが、一つ一つの線に動きがあったり、全体的にやわらかく、はかなきものになっているという作品もあった。高校のときは、一つ一つの線をしっかり刻らなければいけないと思っていたが、今日みた作品は線が少しガタガタしていたり、ふちがかけたりしていて、不完全さの中に美しさもあるのだなと感じた。

K1：篆刻の三法の一つである「章法」はもっと詳しく学びたいと思った。斜めに空間を作る以外にはどのような考えで空間を作っているのかや、辺縁の軽重はどのような意味でその場所を刻っているのかなど気になることだらけだった。水曜日に書展に行くので、今日学んだ篆刻もしっかり見て学んでこようと思う。

K2：石に刻るのはとても技術が必要そうだが、それ以上にデザインなどをする布字の作業に力を入れていることを知って驚いた。確かに、狭い印の中にバランス良く文字がつままっているものなどを見ると、ものすごく凝ったものであると感じた。

K3：篆刻は自分で篆書を書いて自分で石などに刻るという作品なので、墨で書く書の作品とはまた違った面白さ美しさがあると感じた。しかし、刻るといっても、角張った線、丸みを帯びた線、流れるような線など、表現の仕方は様々で、書の作品に似ているなとも感じた。篆刻用の辞書の「山」を見て、同じ「山」でも様々な形があるので、自分の名前の形にはどんなものがあるのかと気になった。

Y：細い線であってもきれいに線が出ていて、初めて篆刻を「きれいだ」と思った。

N：篆書の模様のような細やかさや漢字らしからぬ曲線が好きだ。

高校書道で篆刻の経験がある学生はいたが、印を対象とした鑑賞を行った者はいなかった。まず、印が書の鑑賞でもある点に驚きを感じていたようである。これまで印に対していただいていたイメージとは異なり、細い線や柔らかい線や空間（余白）への気づきがあり、「書の作品と似ている」という記述のように、印を書きとして見ようとしているようであった。

5-5. 県展鑑賞発表

県展鑑賞レポートは、1) 直観的鑑賞、2) 分析的鑑賞¹⁰⁾、3) 感想で構成した。100点の作品を見て、直観的鑑賞で1作品を決める。次に、その作品に対する分析的鑑賞を行うが、その際には書の構成要素を中心とする「書を見る」観点から分析と考察を行うこととした。

Y：自分と同じ作品を選んでいる人が他にもいて違う観点を取り上げているのもあれば、観点は同じでも見方が違っていているものもあって、鑑賞も人それぞれだということを実感した。

- H1:「何を書いてあるかわからないけど、引きつけられる、感じるものがある」という思いが本当の直観的鑑賞であって、知らぬ間にそれを感じていた自分にとても嬉しさを感じた。
- K3:今回他の人の鑑賞の発表を聞いてそれぞれに異なる見方や感じ方があるなと思った。特に『茶烟』という作品が3つ出てきて、大きさや潤滑、配置などは当然共通していたが、そこから感じた印象や分析には違いがあると感じ、おもしろいと思った。Tさんが感想のところで「作者だけではなく、鑑賞する人も個性が出る」と言っていたが、本当にその通りだなと私も感じた。
- K1:2人の人が私と同じ作品を鑑賞してきていて、それぞれ感じ方や捉え方が異なっていたので、自分と対比することで新たな発見ができ、とても面白かった。
- N:3人が同じ作品を取り上げていることに驚いた。発表でも言っていたが、観点が違う部分もあり、同じ部分もありで、違う部分というのがその人の価値感みたいなものなのかなと思った。
- T:3人が同じ作品を見ていたのに驚いた。しかし、同じ作品を見ているのに、着眼点が異なっていたので、おもしろいと思った。私は余白について記述していなかったため、他の人の発表で余白によって作品に明るさがあるという視点が新しいと思った。
- H2:見る人によって作品への観点はこれほど異なるのだと思った。
- T:紙にも作者の思いが込められており、紙選びからして書のイメージ、言葉のイメージ、時代背景を表現していると思った。
- Y:書の線質には書く人の感情なども表れると思うが、小説の文章をどのように読み取ったのかということまで表すことができるのは面白く感じた。また、遠くから作品を観た印象と近くで見た印象を比べているのは、書いている人は近くで作品を見ながら書いているが、遠くから見ることも考えながら書いているのかなと思った。
- K3:調和体は、草書などと違って「読める」書体であり、それゆえに興味をひかれて足をとめるということも、一つの直観的鑑賞であるなと感じた。
- N:「儂い美しさ」や「静かな強さ」という表現をされている人がいたが、面白い鑑賞をする人は、表現の仕方も素敵なのだなと思った。
- K2:それぞれの作品の良さを様々な言葉、表現で感じることができた。
- H1:自分が感じたことを文字にすること、表現する難しさを感じた。

レポートには、それぞれの観点からの分析が行われており、直観的鑑賞で留まっている者は見られなかった。「構図」については、「余白」として取り上げている学生が7名いたが、内容には「構図」に関わる要素が取り上げられており、「構図」として詳細な視点から分析を行っていた。「線」については「方向」「線質」、墨色については「潤滑」に注目している学生が多かった。5-3.でも触れたように、各学生が積極的に直観的鑑賞で選んだ作品に魅かれた要素を細かく分析しようとするレポートであった。感想に「中国の詩の作品

など、意味は全く分からないにも関わらず、構図や紙の色、墨色の違いで、異なった美しさを感じるというのは鑑賞中しばしばあった。書の構成要素の違いによるものではないかと感じた。」とあったが、それぞれの書から受ける美しさが異なるのは、作品の構成が異なるからだという気づきも見られた。

当初は作品を「読める」「読めない」によって鑑賞の幅が狭まることも危惧していたが、判読可能かどうかによって作品を選んでいる様子は見られなかった。学生の記述にも「文字を先に読んでしまい、造形性から先に入るのは難しいのではないかと考えていた。しかし、実際に鑑賞してみたら、文字の形や線の流れを最初に見ることができたように思う。文字の形から作品全体の雰囲気を感じ、「読めなくても、「この形いいな」とまずは感じることが大切であると感じた。」とあるように、判読可能かどうかは関係なく、文字の造形性を楽しめた様子も窺えた。

また、実際に大きな紙に書かれている書を間近で見ることで、書の迫力を感じたり、画像では感じ得ない表現の機微、書の作成過程、運筆についても関心を向けている記述も見られた。「実際に書いてあるものを見ると、作品の大きさや筆遣い、かすれや滲みといった細かいところまで感じることができる」「筆を押し付けて書いているような力強さがどの文字にもあった」「書かれている途中の様子や作者はどんな人で、このようなことを思いながら作品作りをしたのか気になった」のように、実際に書いている様子や運筆をイメージしている学生も見られた。さらに、「今までは手本を真似るということだけを意識していたが、ぱっと見た感じだけでなく、書を構成する要素に目を向けていったら、手本とは違う独自の面白い作品ができると感じた」等、県展鑑賞を通して自分が書を書く際にも意識を向けている者もいた。また、書を見る位置（遠くから見るか近くから見るか）についての記述もあった。大きな紙に書く場合に必要視点であり、創作の過程についても思いをめぐらしている様子が見られた。

鑑賞での分析や思いを言葉で表現することに難しさを感じている記述もあったが、様々な表現を共有することで、表現の方法や工夫についても学びとっているようであった。

今回の県展鑑賞では、同じ作品を3名が取り上げられており、観点の違いや同じ観点でも取り上げ方や分析内容が異なり、鑑賞の幅の広さと深さを改めて感じる機会にもなった。

5-6. 仮名の書

県展鑑賞レポートで1名が仮名の作品を紹介していた。県展鑑賞までの授業でも仮名作品の例も挙げては

いたが、書を見る観点としては学生は十分な把握ができていないと感じ、仮名の書に改めて焦点を当て、取り上げた。

【『高野切第一種・第二種・第三種』】

『古今和歌集』の現存最古のものであり、3人の寄合書と考えられており、それぞれの書としての趣が異なるものである。仮名の書では最も代表的な古典であり、存在は知っている学生もいたが、3種を見比べるのは全員初めてであった。漢字の書と同じように、書の構成要素—線の硬柔、文字の形、連綿の箇所や方向、墨継ぎ等—toに注目をさせて、3種から受ける印象やその要因を考えさせた。

K1：高野切第二種の右から左下への力強い払いについて、全体をぼやっとみてもその払いが印象的に見えてきた。
作品を見るときは、全体を見ることも大事だが、一部分を見て、共通している所や同じ文字でも書き方が違うところなどを見つけられるようになったら、よりいいなと思った。

Y：違う作者の仮名の作品を並べて見ることはなかったので、それぞれに特徴があって面白いと思った。仮名は平仮名で書かれるものだと思っていたので、草書に近いような仮名の作品もあることを知って、仮名と言われる作品もとても範囲が広いと感じた。

T：仮名の文字にふれる機会が少ないので、仮名の文字の美しさを感じ取るのに苦労した。第1～3種の違いも、文字の比較だけではなく、余白や墨の濃淡によって空間の使い方が違うなど、漢字ではあまり目を向けることのない美しさに触れることができた。

H2：仮名で書かれた作品は、私の中では全部同じような作品だという印象が強かったが、高野切の3つの書を見て、それぞれの書の特徴や雰囲気の違いが感じられて、少し仮名の作品にも興味がわいた。

H1：何を美しいと思い、何に感動するかは、驚くほど人それぞれ。だからこそ、この授業のようにみんなで同じものを鑑賞することが面白かったりするだろうと感じた。墨の濃淡もかすれもそこに隠れた意味を感じられる心があるかないかで、存在価値が変わるのではないかと思えた。

K2：仮名の作品をじっくりと鑑賞する機会がなかったため、高野切のことも知らなかった。寄合書であるため、第1～3で全く見た目が違っていて、興味深かった。仮名作品は漢字作品と比べて、軽やかでリズムカルな印象があるが、きっちりと行の上から下までつまっている第2種と、散らしてある第1種は印象が異なるので驚いた。連綿が多く使われている仮名の作品は、草書を除く漢字作品と比べると全く読むことができないので驚いた。

学生の記述からは仮名の書をゆっくり見る機会がなく、仮名の書はどの作品も同じようだと知っている者もいた。ゆっくりと細かい点を見ることで、様々な要素に気付いている。しかし、漢字の書・仮名の書を分けずに書の要素を見ようとする姿勢は現段階では難し

く、漢字・仮名と分けてしまう傾向が見られる。

また、同じ書を見ていても、人によって気づきや感性が全く異なり、皆で同じ書を見ることの楽しさを感じとっている記述が見られた。小中学校の書を見る活動へもつながる重要な気づきであろう。

5-7. 作品鑑賞発表

このレポートでは、図書館等での文献やネット上の作品を対象とし、各自が自由に選んだ作品を鑑賞することを目指した。結果的に日本の古典を5名、日本の現代書を4名が取り上げた。日本の古典の内訳は、仮名で本阿弥光悦の自画賛1名、漢字行草で池大雅の自画賛1名、空海1名、小野道風1名、藤原行成1名であり、図書館等の『書道芸術』『書道全集』やその他の書道古典の文献を参考にし、作品を選んでいった。作品を選ぶ際には、「高校の書道教科書に載っている思い出して分析してみたくなった」「名前は知っているが作品を見たことがない」というような、今回の授業を受ける中で以前目にした古典を思い出し、当時は意識を向けることもなかった作品について、分析を試みようとする様子が見られた。

一方、日本の現代書は、漢字行草3名、漢字楷書1名、調和体1名であった。紙の色や柄、墨の色、文字の配置など、古典では見られない部分に関心を持ち、取り上げているようであった。古典・現代書に関係なく、書の作品を見る観点は同じであり、これまでに学んだ観点を利用し、現代書の分析にも取り組んでいた。

T：発表を見る中で、発表者から見た作品の印象を聞いている人から見た作品の印象が異なるので面白いと思った。

H2：県展とはちがって、私も見たことがない作品についてばかりだったので、新鮮な気持ちで聞くことができた。一つ一つの項目についても、私とはちがう観点からの書の鑑賞をしている人が多かったので、とても面白かった。

K2：今まで自分が全く見たことない現代作品や絵と書が一体となった作品など、様々なものに触れることができた。古典作品の鑑賞は今までも何度かしたことがあったが、それ以外の鑑賞の機会がなかったため、分析的鑑賞のポイントなども興味深かった。分析的鑑賞でどういった部分に目を付けるかは古典でも現代の作品でも個人の感性が出ていて面白いと思った。

H2：自分の想像していた書作品とは違って、幅広い要素で書は構成されていて、様々な角度から楽しむことができると思いました。

今回の鑑賞では各自が作品を選んでいるため、様々な作品に対して、様々な観点を取り上げ、また、同じ観点であっても見方や感じ方が人によって異なることを楽しめたようである。

Y：絵が多い作品だと自分なら取り上げないかもしれないが、絵とのつながりも含めて、一つの作品というところで、絵とのバランスや書体を考えていたのかなと思いつながら見ると楽しかった。

K3：書に絵を入れている作品の鑑賞もおもしろいなと感じた。文字の意味が絵にも表れており、また同様に、絵の表現や内容が文字の線性や書体に表れているなど感じた。

2名が自画賛を取り上げていたが、学生の中には書と絵をどう見るのか戸惑っている学生もいたが、それぞれが影響し合っているという見方が新しい気づきであったようだ。

H1：藤原行成を分析していくうちに、今回は行成の人物像まで少し考えることができた。それが自分ではすごくうれしかった。当てはまっているかどうかはわからないが、書を分析し、線質や書き方の特徴を踏まえた上で、人物像を探れた。

藤原行成の書の鑑賞を進める中で、漠然とではあるが行成の人物像までイメージできたと感じた学生もあり、総合的分析にも踏み込んだ鑑賞と言えるだろう。

5-8. 前衛書

古典からの書は文字性（「記すことによって読むことが可能」¹¹⁾である性質）を重視するのに対し、前衛書とは「文字性否定にまで飛躍したところで書の美を表現しようとするもの」であり、「書の美は造形表象による完全な美の誇示が理想」とし、「時間性と空間性による美的な造形を書線によって成し遂げる」作品である¹²⁾。上田（1963）でも、「前衛書は、読ませるよりも造形的に人に訴えようとするもの」（p.157）であり、文字を媒体にしているとしてもそれを読んでもらうのが第一目的ではないため、「じかに作品を直観して、その造形の美しさ」（p.167）を見るべきであると述べられている。

前衛書の鑑賞には、このような造形性を見ることを徹底する必要があるが、5-7で収集したコメントの中には、「絵か字かわからない作品について、分析の観点がわからなくて無理とあきらめて」前衛書を取り上げなかったというものが見られた。学生にとって、判読不可能であっても「文字である」ことが感じ取れる場合、書として位置付けられる。しかし、文字かどうかの把握ができない場合には、どのように鑑賞をすればよいのか悩んでいる様子が見られた。そのため、前衛書の鑑賞を取り上げた。

紹介した作品は、上田桑鳩『愛』・比田井南谷『作品I・電のヴァリエーション』・井上有一『愚徹』・空海『崔子玉座右名』である。上田、比田井、井上は1940～50年代の作品であるが、古典である空海の書

も文字性よりも造形性が強く表れていることを伝える例として取り上げた。

Y：絵か字かわからない作品についてもこれまでの分析と同じように分析していけばよいということがわかり、これから積極的にそのような作品の面白さや美しさを探していけたらいいと思う。

H2：前衛的な書作品として挙げられた作品を見て、正直どうやったらその字になるのか、どうしてそのように表現したのかが分からなかったですが、それはきっと私の固定概念で見ているからで、固定概念にとらわれない魅力がその書にはあるのかなと思いました。

K2：鑑賞のポイントなどについては、現代の作品も古典作品も大きく変わらないことが不思議だった。それは、現代作品の書家であっても技法など様々なことを古典作品から学んでいるかではないかと思った。そう考えると、前衛的な書作品が昔にも今にもあることが不思議ではないと考えられた。

K1：とても最近の作品なのかなと思ったら、約70年前の作品でとても驚いた。おそらく70年前にこの作品を見た人と現代の人が見た印象は同じなのではないかと思う。書は歴史が長いので、数十年では書に対する捉え方や考え方はあまり変わらないと思うが、自分が老人になったとき、このような作品をあたり前に受け入れることができるようになっていくのかなと思うととても楽しみである。

K3：どの時代においても新しい書体が開拓されており、それがどんどん書として「古典」として扱われていっているのだと思い、今日学んだ前衛書も将来は書の古典としてあつかわれるようになっていくのかなと感じました。

前衛書の鑑賞も古典作品の観点を大きく変えることなく見ていくことで、その作品の分析が可能となることが理解されている。書に対する自身の固定概念に前衛書の様式が含まれていない学生もいるが、固定概念を超えた魅力として、積極的に前衛書を探えようとしている様子も見られた。また、これまでは鑑賞の対象ではなかった前衛書の鑑賞、前衛書の将来の位置付け、書の歴史の流れなど、今後につながる発展的なコメントも見られた。

K：まだまだ書についてわからないことは多いですが、鑑賞することのおもしろさに気づくことができたと思う。書を見る観点は人によって違い、それぞれの個性が強く出るので、学校などにおいて、子どもたちが書いたものをお互い鑑賞し合い、発表するという授業も楽しそうだと感じました。

H1：授業の中で本当にたくさんの書と出会った。「書を見る」ということが奥深く、自分なりに考えることができるようになってきました。線の太さや動きから、表現や伝えたい部分を読み取ることができて、今まで接してきた書とはまた違ったものを知ることができた。これから出会うことがあれば、直観で終わらすのではなく、自分なりの分析をして、書についての理解を深めたい。

最後の授業ということで、15回の授業を通し感じたことを記述しているものがあった。書を見ることを学校現場につなげたい、今後も書の鑑賞を深めていきたいという記述も見られた。

5-9. 最終レポート

15回の授業を通して「書についての考えがどのように変化したのか」をテーマとした最終レポートを見ていく。

まず、全ての学生が、書を見る、書を鑑賞するとはどういうことなのか分からない状態であったが、様々な書を具体的に取り上げながら、書から受ける印象の要因を、構成要素を基に確認していく作業を何度も繰り返す過程で、直観的鑑賞で留まっていた鑑賞が、自分自身がどのような観点で書を見、その観点についてどのような分析を行うのが明確に意識化されるようになっていく。同時に、同じ作品に対する他の人の観点や分析内容を共有することにより、書の鑑賞や分析内容の個人差から自身の鑑賞を再確認する作業も行われていた。

その結果、「今まで見えなかったものが見えるようになった」と記述しているように、書を見る際の視点の明確化へとつながっている。そして、当初は書を汎用的に見ることは非常に困難な様子であったが、「書体や時代などの枠組みにとらわれず、現代の書作品を鑑賞する際に古典作品を参考にしたり、行書作品を鑑賞する際に他の書体の作品を参考にしたりすることが鑑賞には必要だろう」という記述にもあるように、書体、書風、時代等に関係なく、様々な作品を「書」として受け入れ、鑑賞しようとする姿勢へと発展している。

以上の学生の書の鑑賞に対する変化を図示する（図2）。

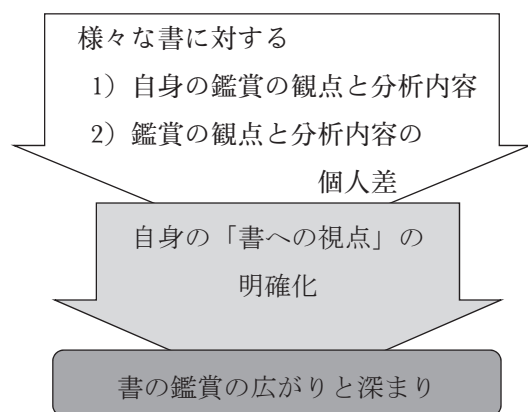


図2 書の鑑賞の流れ

6. まとめと今後の課題

本実践を通して、図2のような書の鑑賞の流れが確認できた。従来、書の鑑賞は個人的活動に留まることが多かったが、本実践では同じ書に対する個人の様々な書の見方を数多く共有したことで、個々人の鑑賞の着眼点の更なる明確化につながったと言えるであろう。

現在、日常生活において書に触れる機会は非常に少なく、「書を見る」ことさえ意識的に行わなければならない状況にあるが、「書を見る」ことが書道・毛筆文化の再評価、そして、小中学校書写の指導内容の充実へとつながることを目指し、「書を見る」有効的な活動のあり方に関する実践的研究を継続していきたい。

注

- 1) 平成25年6月に、全国大学書写書道教育学会、全国大学書道学会等をはじめとする国内の書写書道関連団体が連名で「書写・書道教育に関する要望書」を文部科学大臣と中央教育審議会に提出した。
- 2) 附属中学校での書写授業への参加に関しては、別稿（2017年度発表予定）を参照されたい。
- 3) 第67回みえ県展は平成28年5月21日（土）～6月5日（日）に三重県総合文化センターにて開催された。書部門は100点の作品が展示された。
- 4) 平成20年版学習指導要領では、小学校国語科書写の時間は「各学年年間30単位時間程度」、中学校国語科書写の時間は、第1学年・第2学年は「年間20単位時間程度」、第3学年は「年間10単位時間程度」の配当が挙げられているが、実際の学校現場では十分な書写の時間を取れていない場合もある。
- 5) 松本仁志（2009）『「書くこと」の学びを支える国語科書写の展開』三省堂を参照。
- 6) 書体とは「文字の形や用筆から見て共通の特徴をもっている書のスタイル」であり、古文・篆書・隸書・楷書・行書・草書の6体に分類される場合が多い。（『書の古典と理論』p.163）
- 7) 書風「書かれた文字が持っている趣。同一書体中の様々な書きぶり」を指す（上掲書6）p.163）。
- 8) 臨書とは「優れた古典の技法・内容を学び取りながら字を書くこと」（上掲書6）p.165）であり、書を学ぶ際の基本的な方法である。
- 9) 『書写・書道用語辞典』p.345
- 10) 鑑賞方法には、「直観的鑑賞」「分析的鑑賞」「総合的鑑賞」の3段階がある。「直観的鑑賞」は「一般的・基本的な鑑賞の態度であり、直観的・印象的に作品を味わうことである。（中略）作品を通して印象的に、独自で純粋な作品の命を感受すること」とされているように、作品を初めて見た際に何らかの感情が生まれる段階である。次に「分析的鑑賞」に進み、「書のもつ制作的・構成的・技術的立場から、細かい興味の部分まで詳しく、基本的書美の要素を（中略）観

点から味わい、総合的にしかもの確に、より深く高めようとする」としており、本実践で取り上げた書の構成要素の観点を中心に書を分析的に見ることを指す。最後に「総合的鑑賞」へと進む。「総合的鑑賞」では作者の制作意図や時代背景なども含めての鑑賞となり、本実践では重点を置かなかったが、学生の鑑賞レポートには結果的に総合的鑑賞までのコメントも散見された。（上掲書 9） pp.50～54）

11) 上掲書 9) p.327

12) 上掲書 9) p.188

引用参考文献

上田桑鳩（1963）『書道鑑賞入門』創元手帳文庫

全国大学書道学会編（2013）『書の古典と理論』光村図書

相川政行監修（2002）『書法の美』二玄社